論 文 内 容 の 要 旨

氏　名	邱 馨儀
論 文 題 目	類別詞とカテゴリー化のメカニズムに関する認知言語学的研究 −日中の類別詞を中心に−

要　旨

本論文は、認知言語学の枠組みに基づいて、日中の類別詞のカテゴリー化のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。全体は、六章から構成されている。

第一章「序論」では、本研究の目的と研究対象を明らかにするとともに、類別詞に関する先行研究を批判的に概観している。類別詞の体系では、個々のカテゴリーが独立に存在するのではなく、互いに関連し合い、複雑な関係を成している。従来の類別詞の研究では、基本的に通時的研究と共時的研究の二つの視点からの記述的分析がなされてきた。本章では、以上の視点を背景とする従来の研究に対し、次の問題を指摘している。これまでの類別詞の研究では、基本的に古典的なカテゴリー観に基づき、類別詞の典型的な事例（ないしはプロトタイプ的な事例）の記述が中心となり、類別詞の典型例と周辺事例を統一的に分析する研究がなされていない。また、類別詞の分析に際しては、客観的な判断基準を前提としており、対象世界を知覚し認識する言語主体の主観的な判断に関わる認知的な要因は考慮されていない。本論文では、これまでの類別詞の研究に関する以上の問題を明らかにしている。

第二章では、まず日中の類別詞の分析の背景となる、認知言語学の理論的枠組み（特に、日常言語の類別詞のカテゴリー化のメカニズムの解明に重要な役割を担う認知意味論の基本的な枠組み）を概観している。認知意味論は、古典的な客観主義の意味論とは異なり、言語のカテゴリー化は、人間の経験的な基盤に基づく主観的なカテゴリー化に基づくという視点に立脚している。また、この種のカテゴリー化は、基本的に認知主体の五感、体験、運動感覚をはじめとする身体経験に基づくという立場に立っている。認知言語学の言語観は、人間と環境の相互作用に関わる経験的な側面を重視する言語観である。本章では、この認知言語学の言語観を背景に、類別詞のカテゴリー化に関わる言語現象の諸相を概観している。また、認知的なアプローチから類別詞を分析するために不可欠な基本概念（特に、認知言語学のカテゴリー理論に関わる基本概念）を批判的に検討している。

第三章では、先行研究の問題点を踏まえ、日本語の類別詞の認定基準と類別詞のカテゴリー化の諸相を考察している。本章では、まずケーススタディとして、日本語の類別詞の「頭」に関わる言語現象を綿密に分析し、類別詞の認定基準とカテゴリー化のメカニズムの一面を明らかにしている。

類別詞「頭」は、基本的に大型動物を数える際に用いる類別詞である。しかし、現代日本語において、「頭」の使用範囲は、大型生物から一部の小型生物に拡張される傾向がある。本研究では、認知言語学のプロタイプ理論を用いて、「頭」の成員をプロトタイプ（「頭」の典型事例）と非プロトタイプ（「頭」の周辺事例）に区分する。従来の研究では、「頭」の基本用法の判断基準に関する研究が中心となっている。しかし、先行研究の「頭」の判断基準は、大型動物を数える際に用いる類別詞のカテゴリー化の基準を前提としている。本研究は、まずこの種の判断基準の例外として、大型動物の範疇から逸脱する事例（e.g. 羊、豚、犬、等の「頭」で数えられる事例）を指摘し、典型例から周辺例の用法に関する一般的な規定を試みている。この規定に際し、本章では、「頭」の成員の大小の判断基準とこの判断基準に基づくカテゴリー化を自然に予測する基準として、動物の体型に関し〈大型〉、〈中型〉、〈小型〉、〈その他〉の四つの相対的な下位分類の基準を提示する。本章では、この分類基準に基づき、プロトタイプ的な事例から周辺事例への分布関係を相対的に規定している。

また本章では、類別詞の「頭」が適用する動物の大小の相対的な区分に、類別詞のイメージ性が重要な役割を担う事実を明らかにしている。一般に類別詞には、対象を具象化する機能が認められる。特に、「本」のような形状類別詞は対象の形状により類別する点で、そのイメージ性が他の類別詞よりも相対的に強いと考えられる。類別詞のイメージ性に関する研究はこれまでにも試みられ、ある種の成果が見られる。しかし、この種のイメージ性に関する研究は、形状類別詞の領域に限られているのが現状である。形状類別詞に限らず、類別詞には一般的に多様なイメージ性が認められ、このイメージ性の違いにより対象世界の様々なカテゴリー化がなされている。

本研究では、認知主体が瞬時的に動物の大小を区別できるのは形状のイメージ性によると仮定し、「頭」と共起する対象を A タイプ、B タイプ、C タイプの三つのタイプに分けている。A タイプは、高さと横幅の両方とも比較基準よりも遥かに大きく、大型動物として認識するのが自然なパターンである。その具体例としては、象、マンモス、馬などが挙げられる。一方、B タイプは、対象動物の高さが比較基準よりもやや大きいパターンである。それに対し、C タイプは、対象の高さが比較対象よりも低いパターンである。本章では、以上の A タイプ、B タイプ、C タイプの３つのパターンに基づく相対的な判断基準により、「頭」の類別詞の典型例から周辺事例への分布関係を一般的に規定している。

第四章では、認知言語学的な観点から、類別詞の形成と言語主体の主観的な視点との関連性を考察している。前章は、日本語の「頭」に関わる類別詞の分布関係の考察が中心になっているが、類別詞の選択の認定基準は、異なる言語の認知主体の主観的な捉え方により多分に左右される。日本語の類別詞に対し、中国語では、同一の対象に対し複数の類別詞が使われる傾向がみられる。本章ではこの事実を考慮に入れ、類別詞と言語主体の視点との関係に注目し、言語主体のモノに対する捉え方がどのように類別詞の使用に影響を及ぼすかを明らかにしている。例えば、牛を数える場合には、対象に関する認知主体の視点の切り替えが重要な役割を担う。認知的な観点からみた場合、牛を数える際に類別詞の「頭」と「蹄」のどちらが使われるかは、視点の相対的な切り換え（すなわち、〈数える対象の身体ドメインのどの部分を焦点化するか〉に関する視点の切り換え）が重要な役割を担う。本章では、特に対象動物の身体部位に関わる類別詞（「頭」、「蹄」、「尾」、「羽」、等）の焦点化と視点の切り換えの認知プロセスに注目し、日常言語におけるこの種の類別詞の形成のメカニズムの諸相を明らかにしている。

本章の後半では、さらに身体部位に関わる類別詞の形成と社会・文化的な知識との関係を考察している。この章では、その特殊例（ないしは変則例）として注目される事例として、蚕を「頭」で数える変則例を、知識概念のドメイン・マトリックスの枠組みに基づいて分析している。蚕を類別する場合のマトリックスに含まれる概念は多様であるが、最も中心に位置するドメインは〈生物の概念〉のドメインである。それに対し、残りの〈ペットとしての概念〉、〈商品としての概念〉」、〈家畜としての概念〉、等のドメインは、相対的に周辺に位置している。蚕を数える際には、状況によって、「匹」だけでなく「頭」も使われる。しかし、実際にどちらの類別詞が優先的に使われるかに関しては個人差が認められる。例えば、一般の人の場合には、「匹」で数える頻度が高く、養蚕業の関係者の場合には、「匹」より「頭」で数える頻度が高くなる。本章では、この種の類別詞（「匹」と「頭」）の使用の違いを、上記の知識概念のマトリックスにおける焦点化（すなわち、「匹」の場合には〈生物の概念〉のドメインの焦点化、「頭」の場合には〈家畜の概念〉のドメインの焦点化）との関連で相対的に規定している。

以上の考察から明らかなように、本章では日常言語の類別詞の形成とカテゴリー化のプロセスを、言語主体が対象を解釈する際の認知的な視点との関連で考察している。特に本章では、焦点化と視点の切り換えの認知プロセスに注目し、日常言語におけるこの種の類別詞の形成とカテゴリー化のメカニズムの諸相を明らかにしている。

第五章では、さらに人間の一般的な認知能力の一面を特徴づけるメタファーの側面から、日本語と中国語の類別詞の用法を考察している。一見したところ、メタファーは、類別詞の機能には関係がないようにみえる。しかし、類別詞の使用には、メタファーの認知プロセスが密接に関わっている。類別詞に関わるメタファーの典型例としては、容器のメタファーが挙げられる。本章では、日本語と中国語の空間類別詞を取り上げ、メタファーの認知機能がどのように類別詞の形成に関わっているを考察している。日中両言語には、容器性に関わる多くの空間類別詞が存在する。この種の類別詞の基本的な機能は、日常生活の空間領域を具体的に区別する点にある。その具体例としては、「戸」、「室」、「間」、「棟」、「店」、「寺」、「校」、「院」などが挙げられる。この種の空間類別詞を選択する際には、言語主体は、その空間に関連する事物（あるいは内容物）をカテゴリー化して区分する。この種の区分に基づく類別詞は、対象空間に関するイメージを鮮明に表すことができる。

空間類別詞の中で特に興味深いのは、類別詞の「戸」である。この類別詞は、例えば、被害にあった民家の数を特定する際に使われる。この場合、「戸」は家族のユニットを表し、間接的にその空間にいる住民を示す。したがって、この類別詞には、〈容器–内容物〉の概念に基づくメタファーが関わっている。以上の日本語の類別詞に対し、中国語では、「屋」、「楼」、「船」などの空間類別詞を用いて、その空間にいる人の数を表すことができる。したがって、中国語の空間類別詞にも、〈容器–内容物〉の概念に基づくメタファーが関わっている。本章では、以上の容器のメタファーに関わる、日中両言語の類別詞の認知的分析を試みている。

容器のメタファーに基づく類別詞は、他にも数多く存在する。例えば、日本語の身体類別詞の「口」はその典型例である。身体類別詞の「口」を容器と見なすのは、言語主体の身体的な経験に基づいている。この表現は非常に理解しやすく、日常言語ではよく用いられる。この種の日本語の類別詞に対し、中国語では、「腔」、「身」、「手」、「屁股（お尻）」、「肚子（お腹）」、「鼻子」などの身体類別詞を容器と見なし、それに関連する事物を数えることができる。本章では、このように一見したところ容器と関係がない空間類別詞と身体類別詞の一部も、容器のメタファーに基づいて創造的に拡張される事実を明らかにしている。この種の拡張的な用法は、日中両言語に存在するが、中国語の方により広範に見られる。以上の考察から明らかなように、類別詞の使用とその創造的な拡張には、メタファー的な視点が密接に関わっている。

本章では、さらにケーススタディとして、容量（ないしは数量）に関わる類別詞（e. g.「杯」）のイメージ性をメタファー的な視点から考察している。この種の類別詞の典型例としては、「総生産量は 1 億 4716 万キロリットルで、東京ドームをジョッキとすると約 119 杯分」のような例が考えられる。この種の例では、容器のイメージ性に基づくメタファーが重要な役割を担い、このメタファー機能が、問題の対象の容量（ないしは数量）を間接的に理解するための重要な認識の手段になっている。本章では、この種の認識の手段における次のような認知的効果の存在を明らかにしている。すなわち、抽象的な数量世界を理解する場合、その数量の基準となるモノの具象的なイメージのメタファー写像を介し、問題の対象をより鮮明に捉えやすくする認知的効果である。以上のように本章では、日常言語の類別詞の拡張的な用法を、言語主体による対象のカテゴリー化とこのカテゴリー化に基づくメタファー写像の機能に基づいて実証的に説明している。

第六章の結語と展望の章では、認知言語学と言語学の関連分野からみた本研究の意義と今後の研究の展望を論じている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名	邱 馨儀
論 文 題 目	類別詞とカテゴリー化のメカニズムに関する認知言語学的研究 −日中の類別詞を中心に−

要　旨

認知言語学の枠組みに基づく本論文の類別詞の研究は、従来の古典的なカテゴリー観の根本的な問い直しを図る点で重要な意味をもつ。古典的なカテゴリー観では、カテゴリーは明確な境界をもち、カテゴリーの成員は必要十分条件によって規定可能な共通の属性をもち、同等の資格でそのカテゴリーに帰属するという前提に立っている。これに対し、本論文の類別詞の分析は、外部世界の対象は、カテゴリー化に際して同等の資格で認知されるのではなく、典型的な成員から非典型的な成員へとグレイディエンスをなして相対的にカテゴリー化される事実を明らかにしている点に独創性が認められる。

ただし本研究は、これまでの認知言語学が前提としているプロトタイプ理論が、類別詞による外部世界のカテゴリー化のプロセスを十全な形では説明できない点を指摘している。従来のプロトタイプ理論に基づく類別詞の分析は、言語が反映するカテゴリーを、意味レベル（ないしは概念レベル）のカテゴリーとして分析し、このレベルにおける類別詞のカテゴリー化の規定を試みている。これに対し本研究は、意味レベル（ないしは概念レベル）のカテゴリー化に関わる類別詞だけでなく、この種の分析では予測できない語用論レベルに関わる類別詞のカテゴリー化のメカニズムの解明を試みている点が注目される。

また本研究は、従来の認知言語学のプロトタイプ理論が前提とする典型的カテゴリーの主観的な規定を、類別詞の分析を通して批判的に検討している点に独創性が認められる。これまでの分析では、ある対象がプロトタイプのメンバーか周辺事例のメンバーかは、基本的に分析者の内省と直観に基づいて決定されている。これに対し本研究は、広範な類別詞の具体事例の対照分析に基づいて、プロトタイプの事例をボトムアップ的に規定するアプローチをとっている。本研究の分析では、プロトタイプの事例は内省と直観に基づいてトップダウン的に規定されるのではなく、類別詞の使用事例の頻度と類似度によって経験的に規定される。本論文の類別詞の分析は、これまでのプロトタイプ理論の内省と直観に基づくアプローチに対し根本的な問い直しを迫る点で、重要な意味をもつ。また、本研究の分析は、近年、認知言語学の言語分析の主流をなす、事例の使用頻度を重視する用法基盤モデルのアプローチに対し実証的な裏づけを与える研究としても重要な意味をもつと言える。

また本研究は、従来の意味論中心の類別詞の分析の限界を指摘している。これまでの分析は、類別詞の規定に際し、外部世界の対象の意味レベルないしは概念レベルの属性（例えば、「〜本」の場合の長さ、細さ、等の属性、「〜枚」の場合の薄さ、幅、等の属性）は考慮されているが、外部世界の対象と相互作用する言語主体の身体的な経験に関わる要因は考慮されていない。意味論的な類別詞の分析では、一見したところ典型事例の類別詞の規定は可能であるが、周辺的な事例や拡張事例としての類別詞の用法の一般的な規定は不可能である。本論文では、類別詞の典型事例だけでなく、これまでの分析で例外的な現象と見なされてきた後者の類別詞の事例を、日常生活の状況、場面に関する言語主体の知識のドメイン・マトリックスに基づいて統一的に分析している点に独創性が認められる。

本論文では、さらに人間の一般的な認知能力の一面を特徴づけるメタファーの側面から、日中両言語の類別詞の用法を考察している。本研究では、類別詞に関わるメタファーの典型例として日中の空間類別詞を取り上げ、メタファーの認知プロセスが、この種の類別詞の形成にどのように関わっているかを考察している。日中両言語には、容器性に関わる空間類別詞が広範に存在する。この種の類別詞の基本的な機能は、日常生活の空間領域を具体的に区別する点にある。本研究では、容器性に関わる日中の類別詞の表層分布を、典型例と周辺事例のグレイディエンスのスケールに基づいて相対的に規定するだけでなく、容器性のメタファーに基づいて容量（ないしは数量）を示す類別詞の機能を説明している。また、この種の類別詞のメタファー的な拡張には、次のような認知的効果が存在する点を明らかにしている。すなわち、抽象的な数量世界を理解する場合、その数量の基準となるモノの具象的なイメージのメタファー写像を介し、問題の対象をより鮮明に捉えやすくする認知的効果である。このように本研究では、日常言語の類別詞の拡張的な用法を、言語主体による対象の具象的なイメージ形成とこのイメージ性を介するメタファー写像に基づいて実証的に説明している点に独創性が認められる。

本論文の類別詞の分析は、日常言語に関わる人間の認知のメカニズムの解明に貢献するだけでなく、言語教育をはじめとする言語学の応用分野にも貢献する。これまでの言語教育の研究では、類別詞の意味と用法についての分類はなされているが、本研究が試みている言語主体の認知能力との関連からみた類別詞の体系的な分析はなされていない。本研究の線に沿って、類別詞の使用を、言語主体の認知能力との関連で一般的に規定していくならば、従来よりもさらに効果的な類別詞の指導が可能になる。

本研究は、主に共時的な観点からみた類別詞の分析が中心になっている。通時的な観点からみた類別詞の分析は、今後の課題である。また、本研究で分析の対象とした類別詞の事例は、書き言葉のコーパスが中心になっている。今後の研究としては、さらに話し言葉のコーパスに基づく類別詞の分析も進めていく必要がある。この方面の分析は、今後の研究課題として残される。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	山梨正明
副査	教授	靳 衛衛
副査	教授	柿木重宜

最 終 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名	
試 験 科 目	
判　定	合　格　・　不　合　格

要　旨
学位申請者の研究成果を確認し、審査するため、博士論文を中心に口述試験を実施した（2019 年 1 月 24 日）。 申請者は、本研究のための言語学の理論的枠組み（特に、認知言語学の理論的枠組み）を十分に体得し、言語現象の分析に適切に適用している。また、本研究に関連する国内、国外の重要な論文、研究書、等の文献を精読し、その知見を本研究に適切に反映している。申請者は上述の口述試験において、以上の学問的な知識と研究能力を背景に、論文内容に関する理論面、実証面の質問に対し明確にかつ的確に答えることができた。尚、本研究の研究成果の一部は、比較文化学の分野の代表的な学会誌である『比較文化研究』(No.132、2018)に掲載され、高い評価を得ている。この点においても、本研究は、言語学の関連学会における学問的水準に達している。 申請者の外国語の試験については、日本語により執筆された学位論文と日本語、英語、中国語の要約における高い表現力と理解力から判断し試験を免除した。 以上の諸点を総合し慎重に判断した結果、審査委員会は、本博士論文に対し全員一致で博士（言語文化）の学位授与を適格と認め、合格と判断した。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	山梨正明
副査	教授	靳 衛衛
副査	教授	柿木重宜